昭和三十二年九月
第四号

窯業同窓会会誌

東京工業大学
窯業同窓会

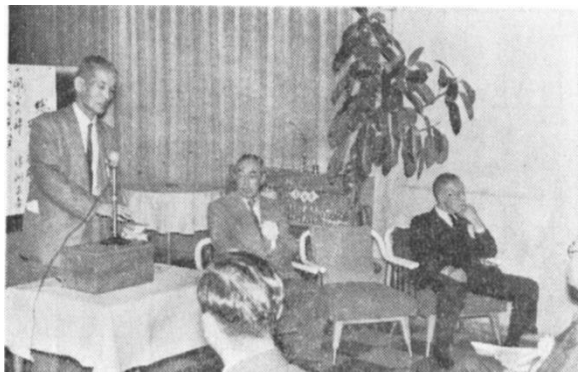
目次

窯業同窓会総会と懇親会……
昭和三十一年度会務報告……
所感 ……浮洲 武彦
卒業後の五十年間を顧みて ……堅田 欽次
卒業五十年に当り記念品を頂いた感想 一条茂喜司
再び熊沢翁訪問の機会を得て……藤岡 幸二
同窓の絆……森谷 太郎
東海支部（仮称）設置の気運熟す ……野口 長次
鈴木己代三氏の死を悼む……山内 俊吉
金島茂太先生を忍ぶ……宮川愛太郎
窯業研究懇談会に就て……山内 俊吉
◇窯業研究懇談会設立趣意書と規約◇旭焼について◇金高寿男氏の台湾便り◇河井寛次郎氏陶業四十年展◇故田端耕造先生十三回忌◇第三回窯業卒業五十年会記◇昭和十二年窯業学科卒業生二十周年記念クラス会記事◇蔵前工業会役員の同窓◇伊藤幸人氏え大河内記念技術賞◇松尾義人氏え窯業協会技術賞◇十時一雄氏(日本碍子)インドへ◇水野逸郎氏ヴェトナムへ◇瀬戸の同窓◇学内だより◇名簿発行と会員の移動に就て

窯業同窓会総会と懇親会

総会

日時 四月二十六日 午後六時四〇分
場所 名古屋駅前豊田ビル内 アラスカ
司会 石塚 正信



浮須副会長の開会の辞

開会の辞

浮洲 副会長

本会は従来東京で行はれていまして地方ではこれが始めてです。大野会長のすゝめでこの地方の同窓の方と相談して御賛成を得ましたので今回行うことになりました。準備万端不慣れで申し訳ありませんが幸い窯業協会総会と一緒になり時候もよく、本日は天気もよく多数の会員の出席があり、初め一一九名の予定でしたが其の後口答や電話で申込みがあり本日は恐らく二〇名位多くなつていると思います。本日は熊沢先生、大野さん其の他古い方々が見えております、あとで熊沢先生の御話があり、また卒業五〇の方々の表彰を行います。尚この会を開きますに当り当地区の有力な会員から御寄附を頂き又、旭硝子社からビールの寄贈がありました。以上厚く御礼申し上げます。何卒充分御歓談の程御願い申上げます。簡単ですがこれを以つて開会の御挨拶といたします。

総会における大野会長の挨拶

会長挨拶

大野 会長

私は明治三九年に卒業しましてその後、旭硝子に勤務しておりましたが、昭和十八年に退任しまして今日に至つております。同窓会は古くからありました。私の卒業と同時位からできました。その時分は同窓会という名ではなく、上野、山下に

「鳥又」という鳥屋がありそこで毎年時期を定めずに地方の人が来ました時に行つていました。その当時は熊沢先生、藤岡幸二氏、東工試、学校の方が出席しておられました。その後大正の終り頃窯業同窓会と改名、今日に至つております。浮洲さんのお話の通り同窓会の総会などは従来東京で行つていましたが窯業協会と結び付けていなかつた故か七〇～八〇名位しか集りませんでしたが、今日は一二〇名以上集り盛会でありまして私達役員一同喜んでいます。これは名古屋が東京に次いで会員の多い故と思いますが今後も何かの機会に東京以外でも行いたいと思います。同窓とは云いながら顔と名前が合いません。私は名前は大体知つていますが今日みていますと顔と名前の一致しない方もみられる様です。他の会員の方もこの機会によく顔と名前を知つてつきあつていたゞきたいと思います。

次に会務報告に移ります。

事業及び会計報告　大野会長

受付でお渡しした事業及び会計報告のプリントに御異議はないと思いますので、御承認願いたいと思います。（別記）　（拍手　多数）

熊沢先生挨拶

古いことについては一番年も古い。長生きするには餅が良いというのでこれを食べていますが、そのためかすこぶる体の調子がよく、八十八が近付いていますがとても元気です。眼を患い、耳もわるく、出て来ることは出来ないと御断りしたが藤岡君始め四～五人の人が私宅を訪ねて来られて実状を見て帰られ、体は丈夫と報告され、何でも一つ出て来いという話で、眼が悪くても汽車に乗れないことはなかろうと、汽車に乗つて出て来ました。珍らしい会に出て来ましたが顔と名前が一緒にならず、しかし古い方にお目にかゝれて誠に喜ばしく家へのよい土産ができました。挨拶として、何も申し上げることはございませんが皆様も御壮健で八〇以上の年令をお迎えになるようお祈りいたします。私の寿命もあと三年と決め三年目から孫にゆずると云つています。孫は私のあとを継ぐことは何も言つていませんが三十一とか二とかださうです。

またお目にかゝることがありますが、特に大野君にはいろ／＼とお世話になりましてありがとうございました。これで私の挨拶をおわります。

（拍手）

卒業後五十年の方への記念品贈呈
大野会長挨拶

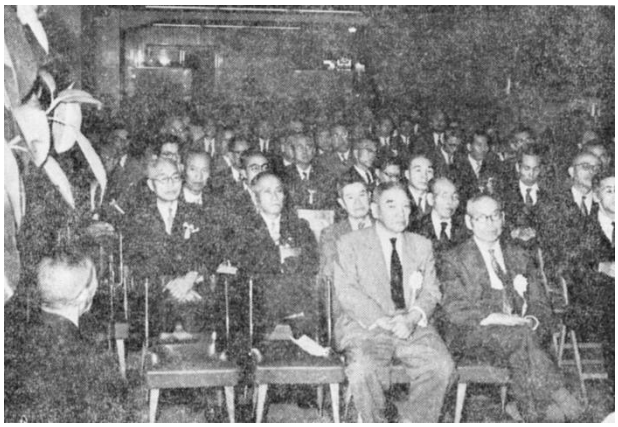
窯業同窓会で卒業五十年の方に心ばかりの記念品を贈ることを昨年から始め、昨年は九名の方々に贈りました。昨年私が丁度五十年であつたから決めたわけではありません。（笑声）

本年はその二回目で今回五十年に相当する方は明治四十年に卒業された方で数名いたが存命の方は一条、堅田、永塚さんの三名です。

永塚さんは血圧高く心臓悪く残念ながら出席できないと言つて来られましたが、残念なことです。

これから記念品を贈呈しますが、記念品は京都の同窓の陶芸家辻晋六君が心魂を打込んで製作されたもので一尺五寸位の立派な花瓶です。辻君は本日も出て来ておられますが深く感謝します。

一条さんは広島で、堅田さんは福島で、永塚さんは埼玉でお持ち帰り願うことは大変ですので御送りすることにして本日は目録だけお渡ししておきます。



総会席上における卒業五十年会の堅田氏（左）と一条氏（共に最前列）

記念品贈呈

一条氏、堅田氏、永塚氏（田賀井氏代る）

堅田氏挨拶

私は福島県から参りました堅田です。本日はかくも盛大に記念して頂き有難うございました。

五十年と申しますとその時生れた方でも五十になつているのでこの中にはまだ生れてなかつた方も多いことでしよう。あと五十年位長生したいと思つております。こゝへ来る時、私と同期の

永塚君から電話がありまして、眼底出血で静養中の為出て来られないので皆様に宜敷くとのことでありました。

一条氏挨拶

私は先きに一条と言はれ恐縮に思つています。私は大阪を出まして、大正三年蔵前の窯業科に合併した時の条件として入れていたゞきました。

私の子供(二男)も蔵前に入れていたゞいて、大変関係は深いのですが、それにも拘らず同じように扱つていたゞき、五十年の記念品をいたゞくのは感謝にたえない次第でして、厚く御礼申し上げます。

母校報告

山内教授

山内教授の母校近況報告

浮洲さん、檜山さんを始め地元卒業生の御尽力によりかくも盛大な同窓会が開かれることになり大変有難うございました。極く簡単に母校の報告をさせて頂きます。母校の学生は以前は三〇〇名の定員でありましたが現在三八五名に増員されました。はじめは専門に分れず一緒に入学許可をしますが、学年の進むにつれ幾つかの学科に自分の好みによつてわかれてゆきます。窯業は新学制では染料、電気化学、応用化学、化学工学、燃料等と一緒になり化学工学科として一括されました。

その収容学生数は一二〇名位です。この人数は実験設備から来た数字でこの数を越すと断るわけですが今迄に一二〇名を越えたことは一回位でした。昨年までは最終の年度に於て半年間卒業論文の研究をすることになつていましたが私が学科課程の委員長をしていた時、卒業研究期間を最終学年一年間やることに改めました。現在窯業の専門学科目は主として三年、四年を通じ珪酸塩、物理化学、窯業各部門に亙り成るべく骨子を講義し、昔の様にたくさんの専門的なことは教えていません。講義時間の関係もあり、あまり専門的なことは教授せず出来るだけ基礎的なことを教える様につとめているわけです。そして足りないところは卒業論文に関する研究で補うようにしています。窯業の卒業生は毎年十名前後ですが最近は就職がよく引つぱりだこで三〇名位はいないと皆様に顔向けできないのではないかと思います。

学生の就職に関しては、日本工業教育協会の申合せで工科関係は十月十七日迄は求人者に推薦してはいけないことになつていますが、推薦するとすぐ決る人が大部分で、就職は心配したことはありませんが、私共は何とかして窯業に対する関心を学生間に深めて窯業に進む学生数を増すことに努めています。

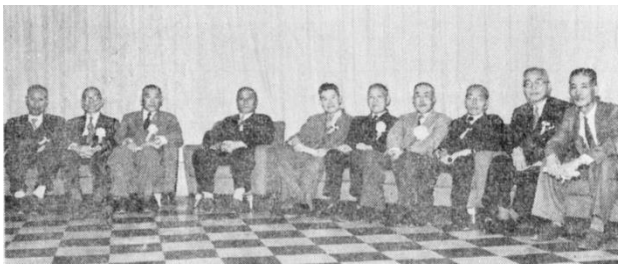
学部の講座は、三講座で完全講座(教授一、助教授一、助手二、雇員一が一講座)がそのうち二講座、不完全講座が(教授〇、助教授一、助手二)一講座あり全部で実際は二講座半でしたが、昨年から不完全講座の教授一名が増えて完全三講座になり教授三名、助教授三名、助手六名、雇員三名の定員になりました。

窯業研究所の方は二教授、二助教授、五助手で二講座分の定員で四部門を形作つていましたが、今年はその重要性が認められて一講座が増設されて、完全な三講座となり学部の方と定員が同じになりました。窯業研究所は設立以来十四年になりますが、未だ独立の建物もなくその拡張は相当困難です。当大学内附置研究所は現在四つありますが、その中で小さい組織の窯業研究所と建築材料研究所との合併案がありますが我国には無機工業材料の研究所は殆んどなく、国としても又大学としても極めてその存在は重要であるので、長い歴史と伝統をもつ母校の窯業がこの中心として進まねばならぬことを痛感し、併合についてはこの線にそい独立して進む様努力しています。

最後に窯業関係職員数は、私的な研究員を入れ約六〇名います。そして日日新しい科学技術に追随してゆく為の不断の努力をつづけています。研究に就いては教授の研究活動を大いに伸ばす意味で若い人々は助手会などを作り学の内外部から色々の分野の講師を招いたり、研究会をやつたりして、活潑に活動しています。これについても御支援をいただきたいと存じます。最近若い助手二人が米国のベンシルバニア州立大学に留学中であります。

窯業は窯業研究所と学部の窯業教室との二つに分れていますが、お互に協力して非常に仲よく

やつて多くの研究成果をあげています。どうぞ皆さん方の今後の御協力御鞭韃をお願いいたします。



控室における大先輩諸氏

閉会の辞

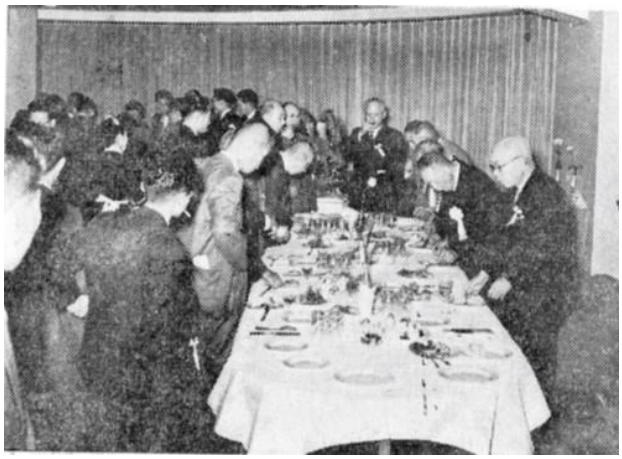
江副副会長

時間も大分過ぎておなかもすいていると思いますので簡単にいたしますが、諸事滞りなく終りました。山内先生の学校の概要についてのお話を聞き、一寸意外に感じています。窯業科十名とは今から五十年前の人数と同じでありますが、五十年前と今では事業体は比べものにならない位に発展しています。これは政治力の微弱によるものと思いますが、お互の努力も不足している故と思います。御協力をお願しこれを以つて閉会の辞と致します。(野口長次記)

懇親会(総会に引続き盛大に行はれた)

懇親会風景 ①

懇親会風景 ②



懇親会風景 ③

懇親会カクテルパーテーのメインテーブルは、入つて右側で氷製の鷹の彫刻が明るいシヤンデリアに美しく輝いてすこぶる上品でよい気分である。どんなテーブルに着いてよいやら半ばテレるやうな気もしたが、会長の先導で熊沢先生を始め卒業五十年生先輩が席に着くと、一同も三々五々思い思いのテーブルに陣取つて、祝詞と乾盃に移つたが、あまり盛会なので席についても持つべきコツプの所在がどこやらといつたとまどいも起つたようだつた。さすが中京随一のアラスカでは、料理もサービスも満点、各自は席をめぐり盃を重ねよい気分となり互いに健康を祝い旧懐を偲び、時の過ぎるのも知らなかつた。未だ会も半ばだと思つていたらもう予定の時刻に達して

いて、同窓会万才をしなければならなくなつて皆心残りがあつたようだが、しかしこれも今回の会が盛会裡に終つたことを物語るもので、主催の中京同窓生諸兄の御心尽の賜と感謝しながら散会した。

（田賀井秀夫記）

同窓会かみしも脱いで語り合い
旧友は白毛とはげを笑い合い
じゞと孫の様に居る同窓会
血圧を語り合うよな年になり
クラス会恐妻家えの年になり

昭和三十一年度会務報告

主なる事業に就ての大要を報告致します。

一、昭和三十一年度定期総会と懇親会

四月六日に母校に於て開催し始めての行事として卒業五年の方々えの記念品贈呈式と山内副会長の欧米視察旅行の送別会を兼ねて盛大に挙行された。

総会では役員の任期満了に伴ない改選があり、又特別講談会がありましたが、この経過は会誌第三号にて報告しましたので略記致します。

一、会誌第三号の発行

昭和三十一年八月に発行して皆様の御手許に御送りしましたので御覧下さつたことゝ存じます。回を重ねる毎に充実して来たと思いますが御批判や御希望を御きかせ下さると同時に各クラスからの原稿を御願い下さいまして一層親しめる会誌に育てゝ頂きたいと存じます。

一、名簿の発行

昭和三十一年十一月末に発行しました、宮川愛太郎氏の不断の御努力によつて回を重ねるに従つて完璧となり、同窓生の連絡に大変役立つていると思います。

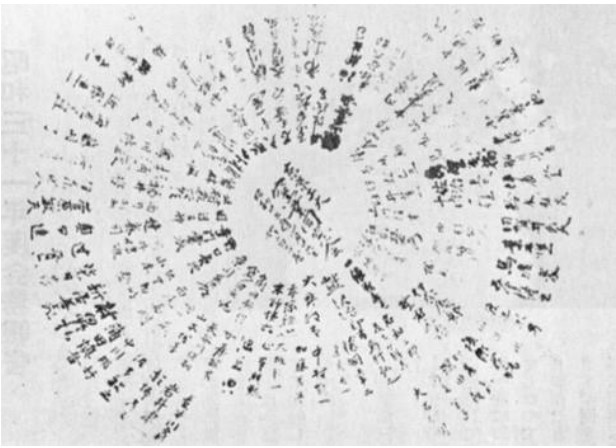
発行に当りいつも有力会社の広告御掲載による御援助を感謝します。一層信頼し得る名簿を出す為には会員皆様から御住所や勤務先其他の移動がありました節は御一報下さる様御協力を御願い致します。

一、常任幹事会の開催

適時開催して会の事業運営等に関して協議した。

一、総会及懇親会を名古屋地区で開催の経過

昭和三十一年四月の総会に於ても本会の総会と懇親会を名古屋方面で開いたら如何との声もあつたので、常任幹事会でも議題となり宮川幹事より浮洲副会長を通じ同志の御意向をきいて貰うことにした。其後浮洲副会長の御配慮により、嘉悦新（伊奈製陶）五十鈴隆吉（佐治タイル）石塚正信（石塚硝子）馬渡　豪（日本陶管）名和二郎（日本特殊陶業）大石信男（日本陶器）十時一雄（日本碍子）野口長次（名古屋工試）繪山真平（名古屋工大）加藤政良（瀬戸地区）の方々を準備委員とし、其他の同窓諸兄の御協力もあつて開会の運びとなつたものであるが、本部との打合は浮洲氏が途中で御病気の為檜山氏が二月二十三日に上京来学されて常任幹事が集り日時、会場、其他の事項に就て協議打合をした。三月七日に常任幹事会を旭硝子社木挽寮で開催、大野会長、山内、倉田副会長及び太田、村田、近藤、杉浦、田賀井、宮川各幹事が出席した。席上名古屋で総会及懇親会を開催の件に付宮川幹事より浮洲副会長と数回に亘る書面の打合せ及檜山氏上京来学打合の経過を報告し、「四月二十六日午後六時から名古屋駅前豊田ビル内アラスカで総会と懇親会を開催する件」を再確認し、併せて御多忙中を開催準備に御尽力下さる皆様に感謝の意を表した。



寄せ書

尚卒業五十年になる堅田、永塚、一条の三氏に贈る記念品は今回も同窓の辻晋六氏に製作を依頼する。熊沢治郎吉先生を招待すること（大野会長が連絡に当る）。通知は往復はがきに印刷し返信は東海炉材内浮洲副会長宛にすることなどを協議決定し、其他は名古屋の方々えに一任することにした。（庶務幹事　稲生、太田、村田）

収支決算報告

（自 昭和三十一年三月二十二日
至 昭和三十二年三月三十一日）

収入の部　二三〇、九一六円也　収入合計

内訳
五一二円　前年度繰越金
三〇四円　預金利子
七九、六〇〇円　事業寄附金（一三九名）
四六、五〇〇円　懇親会費（九三名分）
一〇四、〇〇〇円　名簿及会誌広告料金

支出の部　二二三、二六四円也　支出合計

内訳
八、〇〇〇円　総会、懇親会通信費
三、五〇〇円　同　印刷其他
五一、二八六円　懇親会料理其他
八七、五五〇円　名簿印刷費（一〇〇〇部）其他
八、四五〇円　同　発送費
三〇、三五五円　会誌三号印刷費
六、四〇〇円　同　発送費
二二、〇〇〇円　卒業五〇年（九名）記念品代
五、七二三円　会議及雑費

差引残高
七、六五二円　次年度え繰越金

以上

会計幹事　近藤連一、杉浦孝三

所感

副会長　浮洲武彦

窯業同窓会の総会が初めて地方に持出され、昭和三十二年四月二十六日に多数の同窓者を有する名古屋で開催されたことは、甚だ意義深いものがありました。

此の開催は何分初めての試みで成否の程が気遣はれ、大野会長始め本部の方々で前年より慎重に計画が練られ、地元名古屋では、有志会員が再三参集協議をして実行計画を樹てましたが、期日は恰も窯業協会の総会が同地に行はるゝ日と同じであつた機会にも恵まれ予想以上の盛会であつたことは有難い事でした。

当日は出席会員百弐拾数名に及び名古屋アラスカの二階食堂全部を借り切つて行はれ型通りに総会の行事がすんだ後パーテーが開かれ会員は思い〳〵のテーブルに着いてビールの満を引き最長老熊沢翁を初め一同極めてなごやかな雰囲気の裡に懇談が行はれ時の移るを知らない程の盛況でした。

斯くして同窓会の存在が地方的に深く印象づけられ、会の今後の発展に効果のあつたことは疑のない所でありました。

私は副会長の列に連らなつて居りますが勤務地の関係もあつて、会に対し日常何等の御手伝が出来ず、誠に申訳のない次第ですが、今度名古屋の総会に就て地元の会員の方々と共に準備などを行つた関係で、会の内容にも多少触れ、其結果感じたことは本会の運営に関し、本部当事者の方に相当の御苦労をかけて居ると云うことです。即ち会の運営の実務は本部が、母校窯業研究所に置かれてあり、主に同学教宮に御世話を願つて居ります為、多大の便宜を得又経費が節約されて居ることを銘記しなければなりません。

次に本会は従来単なる同窓の懇親機関で、其発祥は昔東京在住の有志同窓を以て時折会合した「鳥又会」に起因するものでありますが、歴代の会長さんの御努力によつて年と共に会員も増加し、今日の盛況を見るに至つたものでありますが元来会の目的は、同窓の懇親を主としたものだけに運営に要する経費は豊かでなく、毎年一回事業の資金として有志の会員から受ける寄附金を以て賄はれて居りますので、収入の安定を望み難く、其の度に当事者の苦心があります。斯の様な状態では会の発展は不可能でせう。何か新しい途が展けなくてはならないと感ぜられます。

申す迄もなく窯業同窓会の会員は全国に散在して居りますので、年一回東京で開かれる総会と、会報を通じて本部から呼掛けても、地方各地迄徹底させることは望み難いとの理由から、東海では支部結成の機運が生じて居ります。之が各地に結成される様になれば、地方会員としても地方の集まりを通じて会に対する認識が深まり、おのづから会の発展を見るに至る事は明瞭でありませう。此の意味に於て、私は本日を契機として各地に支部が設立されんことを望んで止みません。

卒業後の五十年間を顧見て

堅田欽次

明治四十年に蔵前を出て今年で丁度五十年生きながらえた甲斐あつて、去る四月名古屋市で同窓百二十余名御出席の下に盛大に卒業五十年の御祝いを受け此上もなき有難き事と感銘いたし

ました。入学当時は、七名入学しましたが、現在は僅かに永塚氏と小生の二人きりで在学当時の事を思い浮べますと、丁度四月頃になりますと裏の隅田川を汐干狩の舟がドンチヤンドンチヤンと川を下つて行く。其さわぎに一同が実習なんか止めて飛び出し、大谷先生に叱られた事などを思い浮べますと、この五十年間は瞬くの間で、幼少の頃には文久銭、二厘銭、天保銭などあり、其当時は米が一升八銭位かと思う頃から育ち、其後好運とでも申しますか、外国との戦争には全部に、其初めは日清、日露、第一次世界大戦、満州事変、支那事変、最後は第二次世界大戦で敗戦と前後六回で全くに有為転変、よくも其間を生きながらえた事と感深いものがあります。

卒業後は耐火煉瓦会社に入社し、勤続十八年或る事情の下に辞職しましたが、其年で新規就職するにしましても、最早や既に首の骨も硬いし、此年頃で勤務などするよりも反つて元々技術屋でもあり、又永年の間会社で会得した耐火煉瓦事業を例へ小さくとも個人営業をと決意し、背広服などカナグリ捨てカーキー色の作業服に身を固め、自転車姿で出発しました。

工場にあつては、工場長技師長でもあり、販売購買事務何でもやつてのけましたが、会社勤めなどする時よりも心持ちは実に愉快此上もありませんでした。申し上げる迄もなく何んの営業でも先づ第一には受註する事ですが、会社に在職当時は顔出しさえすれば相当受註も出来た小生には、其点に何等の心配なしと大いに自負心を以て大丈夫と自惚れ、個人経営を決意事業を始めました。処が事実は此に反し、在社当時とは打つて変つて、御得意先の態度が註文どころか尻込み状態で註文皆無、茲に至つて考へました。在社当時は大会社と云う大きなバツクがあつたればこそ受註出来たが、個人ともなれば又別で正に成る程其通りと思つた時は既に遅く、殊に大正末期、昭和の初め頃不況のドン底で、一例を申しますと耐火煉瓦並型一個の売値が東京市内持込み渡し金四銭七厘位ですから御想像も付く事と思います。其上に小供等は教育盛りで加へて取引の銀行三つには次々と取付けされ、当座預金は皆無となり、借金は増す一方、世間ではよくニツチモサツチモいかなくなると、小西流で申すなら（なんと申しましようか、無い袖はフレぬ借金取りは鶯の声など）とよく申しますが、此時の心の苦しみは並大低ではありませんでした。事茲に至つては力一杯敢斗するより外なし、借金して命を取られる訳はないから悲観する必要もないと考へました。唯信用と誠意がものをいう其以外には観念の途がなく、然し有難い事には、在校当時ボート選手迄やつた位身体は至つて頑健其者で、毎日運動して一杯引かけ極力眠る。眠つて其日其日を送れば段々に月日の経過と共に春が来て、何事も解決してくれるものと決心する以外には何物もありませんでした。よく月給取りが商人に、昔の武士が商人にと転じてニツチモサツチモいかなくなつて自殺した話をよく耳にしますが、全く斯る時期の事を申すのだとツクヅクと考へさせられました。

昔から運は寝て待てと申しますが、月日の経過は洵に有難いもので、ソウコウして居る内にソロソロ戦争景気が吹き初め営業も段々と落付きを見せ、其上先輩の親身にまさる御支援などにより、段々と好転し本年を以て創業満三十年を迎へました事は洵に有難い事に思つて居ります。

以上で卒業後の大略を実に拙い文句を並べて申述べましたが、此五〇年間は実に短かいもので御薫陶を受けた平野先生や故父母に対し五十年もの永い一生の間に此しきの事しか出来なかつた事が余りにも意気地無で申訳ないと心から詫び入り毎朝夕神仏に御礼を申上げて居ります。以上で長々と五十年の間を蠢動した前後を申上げ、洵に失礼を致しましたが何と申しましても不況五、六年間の塗炭の苦しみを切り開いてくれたのは全く私の健康其者の有難さと思つて居ります。同窓の方々の中にも永年間御勤めになつてから何か個人で事業をと御目論見の方々に、私のした事が何かの御為めにもなれば幸甚に思います。

何卒同窓の皆様に於かれましては大いに御奮闘と御健康を御祈り申上げて、此にて失礼をさせて戴きます。

卒業五十年に当り 記念品を頂いた感想

一条 茂喜司

窯業同窓会に就てはいつも欠席勝で相済まないと思つて居りましたところ、名古屋の浮洲副会長より四月廿六日名古屋に於て総会を開かれ、他の二氏と共に私にまで卒業五十年記念品を授与さるゝ旨の御通知にて出欠を求められ吃驚しました。続いて東京本部より大野会長の名を以て同様の御通知を受け一層恐縮しました。今度こそ勇躍して参会せねば相済まぬと存じ出席と返事しました。副会長よりは宿の予約、行程等まで懇切なる急信を頂き、又京都の同窓作家辻晋六さんより「窯業同窓会より記念品の製作を命ぜられ悦び感激して造つた品が焼上り工大の宮川幹事さんの御指図によりソチラへ送つた」との連絡があり間もなく箱入りの荷物が拙宅に配達されました。之は旅先で荷厄介にならぬ様にとの細心なる御

考慮と存じました。斯くして私は出発前より御懇切なる取扱いを得て会長さんを初め五十年会幹事諸彦の並々ならぬ御高配に深く感動いたしました。前日刈谷へ参り日本陶管ＫＫに立寄り同社在勤の同窓諸兄に逢い当日名古屋の会場に行きますと熊沢、井深両先輩を初め、遠近各方面より先輩、旧友の御歴々方が多数集まって居られ、ヤアヤアと手を握るもの、肩をたゝくもの、待つて居たぞと言うもの等裃を脱いでの談論に、私も大いに若返りを覚へました。やがて式が始まり大野会長さんより卒業五十年会の主旨に則り御鄭重なる、御祝詞を賜はり、皆様の御温情こもれる記念品を拝受いたしました。顧て私は何等窯業界にも業績なく、本同窓会にも尽すところ無く誠に恥かしい者であります。只卒業後五十年を幸に健康で生きて来た丈であるのに斯る恩典に浴しまして誠に光栄に存じます。茲に皆様の御厚情に対し衷心より深く感謝いたします。拝領の品は陶匠辻晋六氏の力作「釉猫魚文花瓶」と箱書された立派な記念品であります。末永く愛頒し活花と共に同窓各位の御芳情を偲び度いと存じます。只今の私の仕事に就て陶芸作家になる績りかと疑問を持たれる向もあるかと思いますので、少々書きます。此年になつては日暮れて道遠しの感じですが、六ケ敷い研究は若い方々に譲ることゝし、多少の経験に依る陶磁、七宝の彩料や、嘗て海外で修得しました、描画七宝技法の研究を続け産業工芸の一助とも致し度く近く郷里に近い中京方面へ進出仕度いと思つて居ります。何うか今後共宜しく御交誼を願います。

以上蕪詞を述べて感想感謝といたします。

再び熊沢翁訪問の機会を得て

藤岡幸二

私は本年(三十一年)五月に熊沢翁をお尋ねした事を前号に記載して同窓諸彦に御知らせした。これは私には記念すべき事であつたと思つて居る。処がこゝに再び翁を御尋ねする機会が到来したのである。窯業協会が業界の功労者であり長老である熊沢翁に高齢ながら尚カク鑠たる間に翁の懐旧談を拝聴して記録に残して置きたいとの話が持ちあがり、協会名古屋支部の秋季大会を機会に十一月十日に中津川の翁の御宅を訪問と決定した。そして其話相手として中京在住の浮洲武彦君、榎本修二君、東京から大会参加の茂木今朝吉君と協会の富田君それに小生が参加する事になつた。私としては五月に訪問したので重ねての訪問にはいさゝか躊躇したが、折角の協会からの希望でもあり又東京京都を往復して居る此の頃としては多少時日を考慮すれば其挙に加るのは大した負担でもないので敢て快諾した次第、それに五月お会いしたなつかしい記憶を思起して更に年来の親近感を深めたい希望もあつたのである。

十一月八日はワグネル先生記念日で青山の墓地に有志と参拝し更に本年はワグネル先生生誕百廿五年とあつて、独乙大使が工業大学構内の紀念碑に花輪を捧げるとの事で、其式に参列の光栄に浴し、其翌九日東京を「つばめ」でたつて名古屋で中央線に乗換へ多治見駅に下車、市ノ倉の昇峰園に旅装を解き園主の好意にあまへて四人の孫が皆男だと大自慢の光景もほゝえましく、明早朝小鳥山へ案内しませうとの事にそれも甘受して其夜は早く寝に就いた。多治見駅で偶然旧友猪俣君に出会つた。同君は現在日本タイル工業に勤務、令息が来春高校を卒業するので其就職を頼んで置いたら名古屋の某会社に採用が決まり、其件で名古屋に行つて来た帰りだとの事、君の息子がもう就職年令に達したのかと自分の年を忘れて大笑いをして別れた。

十日朝四時に起こされて加藤園主と二人懐中電灯をたよりに古虎渓駅から登る山に二時間ほど歩かされて目的地に着いたのは七時前、霞網を張つた鳥小屋に休憩、小鳥の飛来を待つ、この朝気温暖かく成績極めて不良、天候に左右せらるゝ事なれば致方もなし、然し数十羽はとれて新鮮なる焼鳥の味は充分に味はへた。加藤君手さばきも巧みに小鳥の羽をむしり野火に焙りてだし汁をつけたのを口にして美禄に咽喉を潤す気持は又格別、知る人ぞ知ると云う具合のものだ。十時ともなつて鳥の飛来も途絶へたれば下山、古虎渓駅に着く。昔鍛えた足も近来頓に衰へを見せ、これ位の登山に膝が痛くいささか歩行に困難を感づるとは老いぬる哉である。健脚を誇りしも今は昔談りか感無量。

十二時頃の中央線客車の人となり、名古屋より乗車の浮洲、榎本二君と会い瑞浪駅では茂木、富田二君に合流、中津川駅に着いたのは一時過であつた。富田君は重いテープレコーダーを下げて来られ御苦労千万。

熊沢翁宅の玄関に「御免」と呼べば翁は早速飛出して来られ、「今呼ばれた声は藤岡君だろう?」と問はれる「左様ですよと」答へれば嬉しさうな翁の顔つき、然し私としては矢張り眼が不自由なので声にたよられたのだなといさゝか淋しく感じた。席に通されて一通り久闊を叙してサテ老先生の言はるゝには「こんなに大勢来られて一体わしに何を話せと言うのか」である。記念写真のシ

ヤツターを切つたりして一とき雑談に過したが愈々テープレコーダーにスイツチを入れて話は翁の懐旧談に始まる。

先づ中学入学当時からの苦学談に始まり綿々として尽きない、苗木から岐阜の中学へ出て一時は父君が同行岐阜へ下宿、若い先生の勉学を督励されたとの事であつたが、家計は苦しく、中学校を卒へてからは地方小学校の代用教師を勤めて生計を助けらるゝ事数年、其間准訓導の試験を受けた時の誤認事件の経緯などあつて小学校校長の任務にもつかれ、四、五年を小学先生で過された後、東京工業学校教員養成所に陶磁器科として県の推薦があれば地方産業助成の意味で無試験入学を許すとの事に意を決して東京に出られた。工業学校在学中は相等の年輩でもあり、苦学生でもあり勉学にいそしまれた事は三年間を通じて特待生であつた事でも明かであろう。

当時の先生は高山博士、細木博士、平野教授等、明治三十年に卒業後は岐阜に帰られて陶器学校の校長、試験場の場長と郷土陶業の指導に当られ、最初に倒焔式単独窯に煙突を立てゝ窯を築いた処当業者は煙突で窯が焼けるとは不可思議じや、若しあんな窯で焼物が焼けたら己は逆立して街中を歩き廻つて見せると銭湯に先生が入浴して居られる時に放言した業者があつたそうな、先生はよし一つうまく焼いて鼻をあかせてやるとの意気込で、初窯の時は試験場の門を閉じて業者の入場を禁止し、窯焚夫と二人で思うまゝに石炭を燃料として焼成を終つた。窯出しの結果は見事な磁器が焼上り大言壮語した業者は遂に顔も見せず逆立行進もなかつたが今に痛快な思いがして当時の試験品は今も愛蔵して居るなどゝ黎明期の指導の苦心談にまた一花咲いた形であつた。其頃の学校や試験場で訓育を受けた人々が今は東濃陶業界の土台骨となつて居る人々である。

明治の末期に東京へ帰られて越中島の工業試験所勤務、金沢の硬質陶器会社より海外練習生として英国へ留学中の逸話などは前回にも多少記したので省略するが帰朝後は専ら工業試験所の第三部長として活躍、一時病気にかゝられて松村八次郎翁の枇杷の葉療法を受けられた話から塩素瓦斯応用陶磁器素地の脱鉄試験から松村翁や梅田音五郎氏と多少の紛糾のあつた事、蓚酸脱鉄試験の苦心談など専門的にも中々面白く話は尽きようともしない。

然し吾々の帰る時間も近づいたので別れを惜みつつ袂を分つ事となつた。急に降り出した雨に傘は自分の家のを持つて行け駅迄自分が送つて行つて持つて帰るからと言はれる。とんでもない私達はレインコートを着て居るからそれには及ばぬと断つても中々聞かれず遂にゴム長靴に身を固めて傘を二、三本持つて一緒に出て来られる、眼や耳に不自由はあつても身体は中々の元気さに驚いた。お宅を出た処で通りかゝりのタクシーが拾へたので其処で愈々お別れをして中津川駅に出て四時過の準急名古屋行に乗つた。富田君の重い荷物を下げての同行は中々御苦労であつた、願くば翁の話が完全に収録されて居る事である。

茂木君は友人と会合の約束の為に、榎本君は高血圧で医師に禁酒を命ぜられて養生中だから同行しても苦痛だと共に大曽根駅で下車された。残る浮洲君富田君と私は名古屋駅に下車、最近新築のビルの地階食堂街にもぐり込み今日の話を思出しつゝ同窓や古い時代の話に杯を重ねて別れた。計らずも二回会つた熊沢翁に次に会う日は果して何日であろうか、翁の健康は中々良さそうだが日常御生活の環境が誠にお気の毒に感ぜられた。それは五月訪問の時は翁の次女の御夫婦が一緒に住んで居られて翁の御世話をされて居られたから何等心配も無い様子であつたが、今度伺つて見ると次女の御主人が胃癌とかで治療の為一家挙つて東京へ移つてしまわれ、今は一人の肉身も居られず老いたる雇女を入れて日々を送つて居られる御様子は誠に御同情申上たい。

来年は駄知に陶器学校が出来るので、駄知で自分の住まへる家を心配してくれると言うから、其方へ引越してこの家は誰かに預つてもらおうと思うとの事だつた。駄知の有志諸君が翁の晩年を楽しく暮さるゝ様万善の策を講ぜらるゝ事を念願してやまない。レコードした翁の懐旧談はいづれ詳しく収録されて窯業雑誌に掲載される事と思うから私はたゞ自分の感想だけを記して同窓諸君の一覧を乞う事とした。

熊沢治郎吉君は明治三十年窯業科教員養成所卒業である。（昭和三十一年十一月三十日記）

同窓の絆

森谷太郎

同窓会が回を重ねるたびに盛大になつてくるのを見るのは誠に喜ばしいことであり、毎回必ず初対面の方々にお会いすることもまた限りなく嬉しいことである。初対面の方々とも十年の知己のような感じでおつき合できるのも同窓生という一つの血のつながりがあるためであろうと思われる。窯業同窓生が極めて親密であるということを他の人々がうらやましく思つているということを聞いたが、これは窯業同窓生の先輩の方々がいづれも親密でその範を示している結果といえるであろう。

東京工大の同窓生はすでに七十年余の長い縦

のつながりがあり、母校の歴史と共に日本においても古い伝統をもつていることは我々の誇とするところであるが、只我々は母校の歴史が長いというだけでは余り意味がないと思う。「煙突の在るところ蔵前有り」といわれたのは我が同窓生の社会的活動の偉大さを表明するものであるが、只工業にたづさわる人の数が多いというだけでは同様に余り意味がないといつてよい。卒業生の社会的活動に輝やかしさがあつて始めて母校の歴史と伝統が光つてくるのではないだろうか。

同窓生が親密であるということはまことに結構で美しいことであるが、前に述べたように一つの母体から生れた血のつながりがあることを思えば人間感情から来る親近感として当然のようにも考えられる。もつともこれあるがためにお互に親愛の絆ができ社会にうるおいが生ずることにもなり、「同窓生というものは実に良いものだ」という感慨がでてくるのであろう。このような人間感情は大切ではあるが、それにおぼれてはいけないと思う。後輩は先輩にあまえてはいけない。同窓生はお互に信頼と尊敬とによつて結ばれるべきもので、決して同志的集団であつてはならない。また同窓生がお互に頼り合うということでなく、お互のやつている仕事を理解し、それを助け合つていくということでありたい。しかし同窓生の中には所謂同業者も沢山あるから助け合うといつてもその方法はおのづから異つてくると思うが、一層大切なことは同窓生がお互に信頼と尊敬をもつてつき合うことのできる一人々々になるということであろう。

かつて英国のオツクスフオード大学を訪ねたとき一つの大きな講堂に案内された。四〇〇年以上の歴史と伝統をもつこの大講堂は古風であるが落付のある豪華な大殿堂である。内部の両側の壁には沢山の立派な肖像画がずらりと一ぱいに並べられている。いづれも英国の国家社会に対して指導的または建設的役割を果した人々の肖像画であり、しかも全部がオツクスフオード大学の卒業生の肖像である。それらの卒業生がどんな人物であり、どのような貢献をして来た人かということが詳細に示されている。在学生の諸氏は日夜これらの信頼と尊敬を受くべき偉大な卒業生の風格と業績に接して卒業してゆくのである。オツクスフオード大学のこのような卒業生がこのように後々の社会活動において輝かしい伝統を創りつつあることこそ、母校の誇であり、飜つて若い新卒業生にとつてはこのような先輩を出した母校を卒業するのだという誇と自信とをもつて伝統を受けついでゆくのである。

これは英国のオツクスフオード大学における卒業生と母校とのつながりであるが、どんな人が「信頼」を受け「尊敬」に値さるべきかは、甚だ六ケ敷い問題である。言葉の概念と内容は時代と共に変るであろうし、また日本のような過渡期にある国にあつては特にこれらの言葉のほんとうの内容を冷静に考えて見る必要があると思うが、とにかく我々同窓生は何かそのようなもので結ばれて行き度いものと思う。

東海支部（假稱）の設置が着々と結実しつつある

野口長次

本誌に詳報されているように本年度の総会は創立以来の盛会で十分に目的を達成したといはれているが、これが動機となつて目下東海支部の設置が有志によつて強くおし進められている。

このような気運を燐え上らせた原因は、何といつてもこの度の会合で、互の胸に深く浸みわたつた懐旧の味であり、いやが上にも親密の度を加えた心の温さであつて、さらに積極的に近くに在住する同志は開放感をもつて、共に語り合う機会を持つべきではなかろうかとまでに相通じるものがあるに至つたからではあるまいか。

その経過を略述すると、名古屋市、多治見、刈谷、常滑市、四日市市、静岡県下の在住有志約二〇名が、六月以来三回にわたつて会合し、本部と接渉しつつ規約、内規の検討を続けているが会員数は少くとも一五〇名以上となるようである。規約の内には従来もしばしば問題となつた経費を会費制として、会の財的基礎を確立して行事を行い易くするとともに、会員には顧問、名誉会員、準会員なども推せんできその効果を十分に発揮しようとする努力が払はれている。なおこれらの詳細についてはさらに本部側の意見も聴して、九月中に最終的な案を定めたい意向で着々とその態勢を進めているが、同地方在住会員の賛同と御協力を御願いしたいと望んでいる。

本部としても、この熱意に動かされて数回の幹事会を開きその要望に添うように努力を続け、将来の発展に備えることを期している。

鈴木己代三氏の死を悼む

山内俊吉

旅先で夕方宿屋に帰つたところ女中さんが学校から「昨日日本碍子の鈴木さんがなくなられた」という電話があつた旨を伝えた。昨年十月日本碍

子社を訪ねた時は、吉本社長はじめ新進技術者の方々と長時間に亘り研究懇談会を開き色々と意見を交換し大変御元気な姿を見ていた矢先のことでその訃報がどうしても信ぜられなかつた。

急いで帰京十日の御葬儀には是非共参上し親しく最後のわかれをすることにして、九日夜東京駅に向つて自宅を出たが風邪のために咳がひどく同車して見送つてくれた、某卒業生に迚も無理だからやめる様忠告され、私も万一名古屋について御迷惑をかける始末になつてはと思い残念ながら車を返した。公私に亘り極めて親しく交つてきたこの友に、最後の別れさえ出来なかつたことは身体の故障のためとは云いながら実に情ない思いで一杯であつた。

氏は御卒業後直ちに日本碍子株式会社に御就職になつた。そのおだやかな人柄の裡にかくされたはげしい技術者的信念に基づく実行力並に温情と誠意に充ちた極めて堅実で且つ深い信頼感のあふれた態度は新しい科学技術に対する知見とすぐれた技術者気質と相俟つて、同社今日の大をなす上に極めて大きな推進力であつたことは言うまでもない。世界第一の碍子工場を目指して熱田工場の新設に日夜想を練り並々ならぬ心労をもつて漸くその実現を見んとする矢先の訃報は氏として残念であつたことは勿論であるが、同社としても最大の痛恨事であつたに違いない。

氏の業績は今日の大をなした同社の専務取締役として又技術の総師であつたことだけでも充分うなづけるが、その間の仕事に対し日本化学会化学技術賞窯業協会技術賞その他の栄誉が贈られたことなどでもよく裏書され、氏が如何に窯業技術の進歩発達に大きく寄与されたかがわかる。更に氏は余力をもつて窯業協会東海支部長その他の学協会並に公私の役職を兼ねられ、これら社外の仕事に対しても多大の貢献をされ名実ともに東海地区に於ける窯業技術者としての最高峰であつた。

この様に述べてくると氏は全く堅実型の技術者で、融通のきかぬ所謂真面目一点張りの人の様に見えるが、決してそうではなく実にユーモラスで退屈しない飄々乎とした面があり趣味も豊かで、その何等屈託のない態度は何人とも親しみとけ合うことの出来る人柄で私も長年に亘るつき合いで一度もいやな気持のしたことはなかつた。この様に鈴木さんは人として技術者として珍らしく立派な方であつた。

私は今いつ御会いしても慈愛に充ちたまなざしで心から御迎え下さつた日を思い出し、なつかしい思いにひたつて筆をとつている。

この貴い友を喪つたことは窯業界は勿論国としても大きな損失であることを今更の様に痛感し、深くその死を悼み母校に職を奉ずるの故を以て同窓生を代表して一文を草し心から茲に哀悼の意を表しその御冥福を祈る次第である。

金島茂太先生を忍ぶ

宮川愛太郎

本学の前身東京高等工業学校が蔵前で全盛時代の大正三年五月に私が窯業科職工として採用され、未だ科の事情もよくわからない九月に、大阪高等工業学校の窯業科が合併され、大阪で入試合格した一年生を加え二、三年生全員を引いて金島教授と川崎助教授が赴任して来られた。本会発行の名簿で大正四、五、六年度の卒業生が多いのはこの為である。合併した翌年には、赤煉瓦の工場の二階を増築して化学分析室淘汰実験室、其他の実験室及研究品の陳列室などが新設された。其他工場の拡張、実験設備の新設などがあつた。

金島先生は明治三十五年七月に大阪高等工業学校窯業科に入学、同三十八年六月に卒業後宮崎県の日平銅山え勤務され分析などの仕事を四年間やつて母校の大阪高工に迎えられ、教鞭をとられた由、当時の窯業科長は梅田音五郎氏(明治二十六年窯業科卒)であつた由話された。尚大正三年に先生が赴任された当時の東京高工窯業科の教官は科長が平野耕輔先生、工場長が芝田理八先生、それに近藤清治先生、中田清次先生などで工場には相馬俊一氏と岩瀬定松氏の御二人と私しかいなかつた。板谷波山先生はこの前の年に退職された様に記憶している。其後米谷忠次郎氏（大正四年卒）と榎本修二氏（大正六年卒）を始め各務鉱三氏（大正五年図卒）次で古山六郎氏なども相前後して金島先生在職中教鞭をとつておられた。

金島先生は約六年間隅田川畔の窯業科で教鞭をとられた後大正九年四月に出発されて英、仏、伊、米の各国を視察して帰国後郷里岡山県下建部村に居を移し、鉱業を経営しておられた。爾後年賀の御挨拶程度の御交宜の為くわしい御様子はわからずに過ぎて来ました所、昨年十月二十三日に東京信濃町の慶応義塾大学病院から目下入院中だが是非話し合いたいから来てくれとの便りを頂き翌二十四日に御見舞に伺つた。御わかれしてから実に三十七年ぶりである。鼻下に髭をたくわえ時々鼻をかるくクンクンとやり乍ら少し神経質に金ぶちの眼鏡越しに見るあの姿、男盛りであつた、当時の姿しか記憶にない私には今七十を幾つか出て病院生活をしておられる先生の御姿には一寸まごついた位であつた。

先生は宿痾の喘息で岡山の日赤に入院加療中に喘息の治療は東京の慶大病院がよい設備と専門医がおることを知つて八月頃から入院しているが経過がよいので近く退院されるとのことであつた。三時間余に亘つて昔話はつきなかつたが看護しておられた奥様と共に涙を流して喜んでおられた。先生には御子さんがおられない御様子で一層昔の部下であつた私に会つて話すのがうれしかつた様に御見うけした。

其後私から連絡して大野政吉、小林作平の両氏も御見舞して頂いたのでこの旨書面で大へん喜んでおられた。郷里に帰られて二度程書面を頂きましたが遂に去る四月十日御永眠された旨の御通知に接し御冥福を御祈りしつゝ弔電を打つた次第である。奥様の御健在を御祈り申し上げます。

窯業研究懇談会に就て

山内俊吉

我国窯業の現状を見て研究者の御互がより緊密な連繋をとり協同の力で研究業績をあげることの重要性を痛感し、母校窯業関係職員を中心とする窯業研究懇談会をつくることにいたしました。ゆくゆくはこの懇談会が中心となり学外の方々にも働きかけ、深い接触を保つて業界と学界との理解を深め、相互に切磋して窯業に関する科学技術一段の進歩を招来する一礎石ともなれば幸であると思います。さゝやかな会費を職員達が出し合つてこの秋頃からスタートしようとしています。

母校にこの様な企てのあることを御報告申し上げ併せて皆さんの理解ある有形無形の御協力を切に御願いいたします。若し皆さんのうちに本会所期の目的を達成させてやろうという御気持の方があり、研究の報告、工場現場の実際その他に関し御話でもしていたゞける様なことがありますなら御面倒ながら幹事迄御申し出下さいましてこの懇談会の席上で拝聴出来る機会を御与え下さいます様御願いいたします。

こゝに窯業研究懇談会の設立の御報告を申し上げ併せて本会に対し充分の御協力御鞭韃を御願い申し上げます。

窯業研究懇談会設立趣意書

近来、世界の科学、技術の進歩は目ざましく、ことに二十世紀後半に入つてからは、一方に於て原子核エネルギーの平和産業への利用あり、他方には人口頭脳を用いての、産業のオートメーション化があつて、この二者が車の両輪となり、遠からずまさに新しい産業革命が惹きおこされようとする情勢にあります。

従つて我窯業工学もまた、これに伴つて飛躍的な発展を要請されており、その速度に対応することが出来なければ窯業工学としての使命を果すことは愚か、近代的な科学技術に伍してゆくことすら不可能になりましよう。

もちろんこれまでも窯業の各分野において懸命な努力がなされて来たことは申すまでもありませんが、あらゆる科学、技術を綜合してその上に窯業工学の体系を築き上げることの必要性が、今日ほど痛感されていることはありません。そのためには第一に窯業工学に含まれる各分野の共同研究、或は研究上の密接な連絡をはかり、つねに研究者相互間の討論や批判を盛んにすることはもとより、さらに窯業以外の他の工学や基礎科学との連絡を緊密にする必要があります。そしてこのためには、より一層研究に努力することはもちろんのこと、その結果を窯業工学の各分野ばかりでなく、それに関連する一層広い工学、科学の研究者に理解される様な形式で発表することが望まれます。こゝにわれわれは互に相励まし、啓発して如上の目的を達成するために、補助機関として東京工業大学の窯業関係職員を以て組織する窯業研究懇談会を設立することにいたしました。今後この会を中心として内外窯業関係の研究のアブストラクトの蒐集と整理、窯業に関連する他の工学或は基礎科学の綜合講演やシンポジウム、研究討論会、研究成果の出版、その他の行事を行い、又研究上共通に必要な設備等の購入やその管理なども企画しております。この会が我々の補助機関として正常な発展をとげることはとりもなおさず窯業工学の進歩の上に極めて大きな寄与をすることであり、それは直ちにまた日本の窯業関係諸工業の飛躍的な発展を意味するものであることを堅く信じております。

以上大方の御援助と御声援を賜りたく、よろしくお願い致す次第であります。

窯業研究懇談会規約

一、本会は窯業研究懇談会と称し主として東京工業大学の窯業関係者を以て組織する。
二、本会は東京工業大学窯業関係教官研究の推進強化を図り、以て窯業の進歩発達に寄与することを目的とする。
三、本会は第二条の目的を達成するために下記の事業を行う。
　１研究懇談会
　２研究発表会及び研究報告等の刊行
　３研究用共通備品及び施設等の円滑運用
　４其の他必要と認めた事項

四、本会の経費は会費其の他の収入を以て支弁する。
五、本会の事業年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三一日に終る。
六、本会に下記の役員を置く。役員は会員の互選とし任期を一年とする。
　1幹事五名(内一名を会計幹事とする)
七、幹事は毎年度始めに前年度の事業及び会計の報告書を提出して会員の承認を得ること。

附　則

本規約は昭和三十二年七月六日より実施する。
本年度幹事　山内俊吉、田賀井秀夫、境野照雄、長谷川泰。会計幹事　宮川愛太郎。

旭焼について

（平野陶磁器コレクション解説書より）

旭焼はワグネル先生の創製にして先生は旧東京大学理学部講師として在職中明治十六年釉薬に亀裂なき陶器の研究に着手せり、其の目的は日本個有の絵画描法を釉薬上に施さんか美術的趣味を減殺するの憂あれども若し之を釉下に施さんか青華と一般大に其の趣味を増加するを以つて、従来本邦にて製出し得ざりし低火度にて亀裂なき白色陶器を創製せんとし、初め之れが試験体として二錢銅貨大の素地を造り、之が焼成には坩堝を用い釉薬の熔融には「マツフル」窯を使用せり。同十七年研究稍々進み小器物を試製するに至り、後大学をはなれ東京市小石川区江戸川町に先生自費にて小工場を設け、大学当時の助手たりし植田豊橘氏に製作の監督をなさしめ器物を試作しつゝありしが、当時農商務省の補助を得て赤坂区葵坂に工場を移し、稍々大なる器物の製作を研究せり。某の製品を吾妻焼と称し器物の裏面に褐色の吾妻焼印を押せり。同二十年之が試験製造全部は蔵前の旧東京職工学校（東京工大の前身）に移り、旭焼と改称し同校に於て同二十六、七年頃研究試作したり、又別に之を工業商品化せんとし、明治二十三年有志の資本により東京市深川区東元町に旭焼製造工場を設け、植田豊橘氏経営の任に当り専ら煖炉用「マントルピース」の「タイル」を製造し輸出を目的としたるも時期尚早なりしか同二十九年工場を閉鎖するの止むなきに至れり。

写真は平野陶磁器コレクション中の旭焼額皿（径一尺二寸五分）で現在本学窯業工場に保管してある。この額皿は明治二十六、七年頃東京職工学校で研究試作したものである。（宮川）

金高寿男氏の台湾便り

金高氏（大正十四年卒）は本年四月に陶磁器製造指導の為に迎えられ、台湾省工礦股份有限公司の北投陶瓷耐火器材庁工程師として赴任しましたが、以下第一信（五月一日投）及第二信（六月二十四日投）が山内俊吉教授宛寄せられたので御披露する次第である。

尚台湾水泥（セメント）有限公司副社長の湯大綸氏（昭和九年卒）はこの会社の顧問をしておられる由である。

（編者記）

第　一　信

拝啓　四月二十七日夜十一時二十分ＣＡＴ機にて羽田港を出発、快適な空の旅を続け沖縄五時着、三十五分に沖縄出発。之の頃より明るくなり雲海をつき進む。時々雲の切目より青い海を見る、緑の原に赤煉瓦の部落が見え出したと思うとも う台湾、時計を見ると八時、かくて無事台湾省の人となりました。昼は工場幹部の歓迎宴、夜は工礦公司の幹部の宴で湯大綸大人も出席王氏早稲田大学出身者等来席台北一の広東料理に舌鼓を打ちました。殊に湯さんとは流調な日本語で東工大時代をなつかしがり、色々諸先生方のエピソートに花を咲かせて夜のふけるのも忘れました。氏は江西省景徳鎮の窯屋の息子で、今はセメントをやっているが陶器が本職で平野先生や熊沢先生が景徳鎮窯視察に出張の時は、湯さんのお父さんの宅に宿つて親交を得ていた等。山内先生は達者か宮川さん今でも学校に居られるか等。近藤先生の息子さんはどこに行つているかと小生も知らぬこまかい問に驚かされました。倉田さんは二度当地に来られた等大変な好意を示されました。

現存当工場には湯さんの教へ子江西省景徳鎮窯業専修学校卒業生三人が各原料部、成形部、窯部の技師として工場、製造係の中心となつてやつています。大陸渡来の人が各部署に入つて生活をしていると云つた方が適当な様です。工礦公司は

窯業にセメントに紡織に石炭に、其の他あらゆる事業を経営している台湾第一の会社、台湾大学出身者を始めあこがれの的だそうです。本島人、大陸人共現在では台湾に平和境をきづいています。日本人に対しては非常な好感を持って接してくれます。二十才以上の者は日本語教育を受けているので日本語はどこに行っても通じるし非常に日本人に似ているので、日本の田舎に行った様な感じで外国等とは思はれません。戦後は旧に復して北京語教育ですが、何しろあの六カ敷い国語が教育を阻害して気の毒です。当局は非常に教育に熱心で市民も又熱心に支持していますが、あの難解な文字の為か刊行物書籍類は数が少なく、且高価です。難解な文字は一度日本教育になれた本島人をして悲しませています。日本に対する郷愁深いものがあり、世界で一番日本人に好意を持っている国民は台湾人でしょう。一生に一度でもいいから日本を見て死にたい。日本に渡行したいと云う聞くもいじらしい希望にはこちらが泣されます。

米が一年に二度も三度も取れる国とて生きて行くには困らない、食うに困る日本とは違うが、何しろ市場が狭いので適当な職を得る面目の保てる職を得るのに一苦労、日本人から見ると一寸贅沢な就職難があるらしいです。現在の処弟の国と云った感矢張り負けても日本人は東洋の希望だ、若い青年達に待つもの大いにあるとの感を深くしました。小生自身も期待に反かない様努力して若い人達への良い引卒者とならねばと覚悟を深くしました。（下略）

第二信

拝啓　其後は御無沙汰致しました。皆様御変りはありませんか、小生御蔭様で無事勤務致し居りますから御安心下さいませ。

渡台以来早や二ケ月、もう大部当地の事情にもなれ片言の中国語で用を足し暑い台湾生活も皆が親切にしてくれますので何不自由なくやっています。当社は台湾第一の会社で傘下に十七業種（紡織、石炭、ゴム、木材、其他種々）の工場を持ち、当工場も其の一です。日本と違い市場の狭い関係で耐火（シヤモツト、珪石、坩堝）衛生陶器、碍子、から食器花瓶からタイル迄殆どありとあらゆるものを一工場でやる建前になっています。皆程度の悪いものですから、然し之だけのものをやるには相当の期間と中国式忍耐を要した事でしょう。

就業員は二五〇名位幹部は元官営の関係で、中国渡来の外省人が握って居り、現場の実権は台湾在来の本省人が主です。本省人の二十歳以上の者は皆日本語で教育された者ですから日本に対する郷愁は大きく、近づくと日本統治時代の話をしてつきる所がありません。外省人も語は通じないが、日本人に対して相当敬意を払っておる。現在日本を見たい、日本に行きたいと云うのは両者共通の夢の様です。中国東亜は負けても矢張り日本人の舞台日本の活躍を待っているの感を深めております。昔の日本精神は台湾に温存されているといった所、この根のたえない内に日本青年の目を中国東亜に向けさせ八光一宇を違った意味で実現させたい。其意味より岸首相の巡遊は時期に適した訪問だったと思います。六月四日は会社のジープを馳って松山空港に首相を見送りました。大変な人気で首相を咫尺の間に送りましたが心なしかあの首相の黒い顔が如何にも東亜の先指導者らしい感を深めた模様元首に対する礼遇の内に飛行機が高く飛び去り見えなくなる迄送って帰りました。今日だけは数少ない日の丸に日本のゆかしさをしのばせました。今も日本の少女による舞踊団が台北の人気をさらっています。一度行って見ましたが入場料二〇円、四〇円、六〇円日本の金で二〇〇円、四〇〇円、六〇〇円生活の割合にすれば恐らく三〇〇円、六〇〇円、九〇〇円もするでしょう。高い入場料を乗りこえて満員の盛況です。日本少女のあまりうまくもない様な歌謡曲でもアンコールの盛況です。恐らく一ケ月位日に二回か三回づつやって続ける事でしょう。

湯大綸氏はセメント会社のえらい人で当社の顧問ですから、時々高級車で会社に乗りつけ、工場を視察して忙し気に帰られる。氏を同窓に持って非常に片身の広い思いをしています。

台湾内に東京工大卒業留学生の会が組織され外省人本省人全部で百二三十名もあり、東京工業大学留学生同窓名薄と云う立派な名薄を作って台湾全土に亘りて活潑に活躍、年二、三回の会合さえもって台湾の工業界を支へて日本の支援を待っている力強いものを感じます。今度の会では小生も呼んでくれるそうです。遠い外国より矢張り近い日本、東洋人には血のつながりを感じます。次代の捨石として出来るかぎり余世を台湾の為に、恥なき日本人として行動する必算ですから何分共に宜敷く御支援の程願ます。今丁度、先輩宮本先生も渡台されているそうですが、お目にはかかりません。宮本先生の台南高工校長時代の業蹟は高く買はれているそうです。先生の教え子達が恩師を迎えて到れりつくせりの歓待には先生も御満足の事と思います。

末筆ながら愚息純一儀何かと御世話になる事と存じますが宜しく御指導の程を願います。

日曜毎の散策に台北市近郷は可成見物しました。最近の暑さには閉口ですがようしたもので、

朝晩のスコール性の夕立に涼を取り又風も良く適度に吹き、日本の暑さとは違つて凌ぎ良い所があります。年間通じての西瓜、バナナ、其他名も知れぬ果物、最近は中国料理にもなれて朝昼晩の三食もどうやら気にせずにすむ様になりました。中国は宴会の多い所で時々大きな宴会がありますが、仲々手ぎわよく行はれるには感心します。夏期休暇も近づき何かと御忙しい事でしよう。御身体を大切に御自愛の程祈り上げます。奥様にも宜敷く御伝へ下さいませ。

先は御無沙汰見舞迄申上ます。　草々

河井寛次郎氏陶業四十年展

河井寛次郎氏は本学の前身東京高等工業学校窯業科を大正三年に卒業された後京都市立の陶磁器試験場に勤務し、陶磁器の研究をされて数年後に独立して陶芸作家としてスタートし、今年は陶業四十年になるので、朝日新聞社の主催で二月十二日より十七日まで京都の高島屋、四月九日より十四日まで東京の高島屋で作品の展覧会が盛大に開催された。大会場には氏の作品が年代順に列べられ多くの人々が興味と感激と尊敬の眼をみはり乍ら作品に吸付けられているのが見うけられた。河井氏をよく知る柳宗悦氏が書かれた「河井の性格とその仕事」の一文から下記を引用させて頂いた。

河井ほど悦びの人は珍らしい、齢をとつてきても、この悦びの感情に衰へを見せない。まるで若者の様な活々とした悦びを重ねてゆく、河井は自分の悦ばしい生活を充分に創作しつゝあるのである。こういう力を有つた人はめつたにない。謂はゞ感激の連続である。時として体の弱るのはその緊張の度が強いためとも思はれる。併し河井の場合では弛緩は更に河井の体を悪くさせるであろう、河井に悦びが途絶えたら、河井の生活は停止するであろう。併し河井にはそれを生み出してゆく力があるのである。このことが他の人とは違う。好きなものゝ多い人は反面に嫌いなものも多い。河井は醜いものや汚れたものを極度に嫌う。併しその受取方で悦びの方をもつと多く受け入れるから、生活は明るいのである。河井は陽気な性質だ、ものに敏感だということは神経が細かい為である。だから一面に弱いところが見える。だから病気にでもなると、人一倍大病になる。実際に河井は肉体的に強壮な質ではない。

併し河井に一旦その受取方が閃くと、はねかえる様に元気になる。河井はそれを物語るのに能弁である。河井の話は泉のように尽きない。それ故熱情的になる、興奮すると眼のうちには涙が光つている。河井は何事でも涙が出るほどに強く受取るのである。河井の弱さも浄さも、皆その中に溶け合つているのだ。

（中略）

河井は焼物の名手である。科学的な教養も手伝つてはいるが先天的な直覚で、素地につき釉薬につき、手法につき即刻に名案をたてる。この天分では当代並びなきものかと思へる。若し古作を模する気になつたら河井は奇蹟を行うであろう。併し河井には不断に新らしく受取るものがあるので、その受取つたものを製作に活さずには居れない、新しい仕事がしたくてたまらないのである。河井のは作りたくてたまらなくて作つた品物である、だから眠つている品ではない。試みたいものが後から後から追つかけているのである。河井はいつもその釉薬で有名だが、特に辰砂釉を自由に用いた。之は彼が情的な性質のまともの現れとも云へよう。近頃手法の上で最も熱意を示したのは練上である。彼は大胆に技を振つた。彼には轆轤ものもあるが型物が特に得意である。この面では今までの誰よりも変化を豊富に示した。之も彼の性格に合つた道なのである陶硯の如きそのよい例で彼の熱愛をこめた仕事であつた。ともかく彼は日本陶芸史に一章を追加した最も特色ある作家の一人なのである。

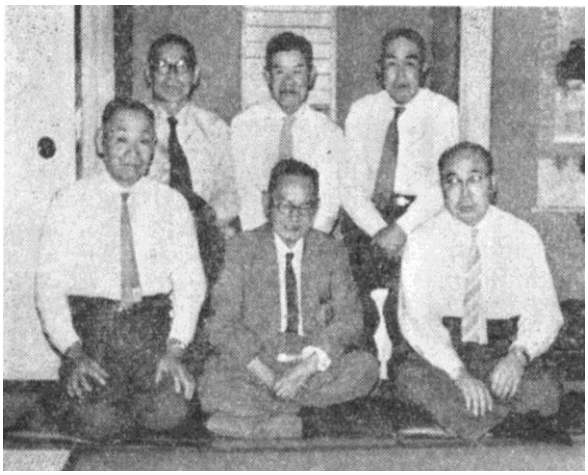
故田端耕造先生十三回忌

本学窯業学科の教授であられた田端先生が昭和十九年十一月三十日の戦争中に御他界されてから早くも十三回忌を迎えたので嗣子田端精一氏（佐々木硝子社勤務）と森谷教授が相談して学内外の関係の深い在京の方々え御知らせして、昨年十一月三十日午後二時、青山墓地のいとう屋に集合した後献花供物など供えられた。先生の墓前に一同参列して読経に次で御遺族、参列者の焼香あり法要を終つた。次で一同は神宮外苑信濃町駅際の学生野球会館に移り田端家の法事の席に参列した。精一氏と親戚代表の謝辞に次で森谷、山内両教授、佐々木硝子社長の御挨拶後交々先生の追憶談などあつて四時半頃終つた。

第三回窯業卒業五〇年会記

昭和三二年五月二二日旭硝子株式会社狸穴寮で、本会を開く、若葉したゝる樹間を透して流れ込む薫風を浴び、飲料カロリーで増熱するに従い、所謂無礼講式で遠慮もなく、大言壮語、気エンをあげる。しかし、何れも古稀前後の老輩共だから、

血圧、筋痛、難視、難聴など老人形異状の一つや二つは現われ、限界線は遠くないが、ソレデモ発会以来、黒リボン界に入つた者は一人もないから、まづ〳〵めでたし〳〵で、意気軒昂、歓談数刻、次回を期して、楽しく散会する。



前列左より亀 啓三郎 明 41（1908）卒、高井 三郎 明 38（1905）卒、森谷 太郎 工大教授 工博 昭 7（1932）卒、後列左より堅田 欽次 明 40（1907）卒、藤岡 幸二 明 38（1905）卒、大野 政吉 明 39（1906）卒の各氏

出 席 者

亀啓三郎(四九年生)、堅田欽次(五〇年生)、大野政吉(五一年生)、高井三郎(五二年生)、藤岡幸二(五二年生)、森谷太郎(工大教授)、田賀井秀夫(工大助教授)外欠席数名。

終に本会開催につき旭硝子株式会社常務取締役同窓倉田元治君の多大なる御厚意を感謝する。

（高井三郎記）

昭和十二年窯業学科卒業生二十周年記念クラス会記事

前回の十五周年の時は興津の水口屋で行われ、高良先輩稲村先輩がお見えになつて同時に五一号会も開きました。今回は遠隔の地の方にも集りと易いようにということで、初めは名古屋地方で何か催しでもある時が良くはないかと思つて居りました。実は今年の窯業協会の総会が名古屋で開かれましたが、その折は窯業同窓会もありますので更に重なるのもどうかと思いまして今日になりました。秋になると又諸種の催で多忙となり時期を失しても困ると思いまして少し急いだ観がありますが、時期的に出席出来なかつた方には申訳ない次第です。

暑中休暇には先生方の御予定もあり態々旅行を繰延べ御出席下さつた由にて誠に有難く存じます。

会場は伊豆の暖香園で出来るだけ質素に心懸けましたが、二十年といえば職業年令的には峠かという処で一応賑かに区切りをつけたいということになり美妓なども交え大いに歓談致しました。皆面影は昔と変りませんが落着きは増した様です。先生方は五年間の報告に非常に喜んで下さいました。翌日は二班に分れ、山内先生及び池上君はゴルフに、河嶋先生、森谷先生及び草間、尾野、岩切の諸君は宇佐美沖に釣に出掛け不漁乍らキス六、コチ二四、ヒメヂ五、ハモ一、ホウボウ一、章魚一を獲て散会しました。

記

一、期日　昭和卅二年七月二十日、
一、場所　伊東、暖香園
一、来賓　山内先生、河嶋先生、森谷先生
一、出席者　岩切君、池上君、尾野君、耕山君、佐々木君
一、欠席者の動静

伊藤君、出席を予定されて居りましたが、突然社用で不可能になり、幹事及び河嶋先生迄お侘びがありました。

白井君、学校の都合により参加出来ず残念なりとのことでした。

藤井君、早くから催促し出席したがつて居りましたが、折悪しく工場の冷修にぶつかり残念でした。

三浦君、八月になれば繰り合せがついたかも知れぬそうで、前日に御手紙を頂き誠に残念でした。

山脇君、お暇がないそうです。（目下奥様が居られないので御不自由のことゝ存じます）東京の会合には出席される由。

以上

（岩切記）

蔵前工業会役員の同窓

蔵前工業会理事　山田精吾(大正一〇年卒)
同　鈴木信一(昭和八年卒)
同　評議員　木船要太郎(大正六年卒)
同　森谷太郎(昭和七年卒)
同　東京支部常議員(幹事)
鈴木保雄(大正七年卒)
同　田賀井秀夫(昭和十三年卒)
同

名古屋工業技術試験所　伊藤幸人氏(昭和五年卒)は永年の研究とその応用」の真価が認められ本年四月二十三日大河内記念技術賞を授与された。

日本特殊陶業株式会社　常務取締役　松尾義人氏（大正十五年卒）は「点火栓の進歩の改善」を達成したことにより窯業協会の通常総会（四月二十五日名古屋商工会議所）席上で技術賞を授与された。

十時一雄氏（日本碍子）インドへ

七月二十日に十時一雄氏（昭和五年卒）来学され河島教授の室で伺つた話によると同氏の勤務先日本碍子株式会社から碍子製造工場の輸出プラント建設のため同社の小島豊之進氏（昭和二年卒）が約三年間この仕事に当り本年二月に完成された由、十時氏は小島氏と交替して九月頃印度へ渡り碍子製造の指導に当る由で二年間位はかゝるだろうとのこと、工場所在地は下記の通り

印度マイソール州（Mysore）、バンガロー市（Bangalore）州政府陶磁器工場（Government pottery Factory）で略称 G・P・F

尚氏の御話によると元日本碍子におられた加藤薫氏（大正五年卒）は陶磁器指導の為約二年前からパキスタンに行つておられる由。

水野逸郎氏ヴエトナムへ

七月十七日に水野逸郎氏（昭和十九年技卒）が来学されての御話によると、今回名工試野口氏などの御斡旋で他の部門の方々十八名と七月三十日に陶磁器指導の為サイゴンへ出発される由。尚氏の話によると山田愿氏（昭和五年卒）はビルマのモールメン（No 60 Dolhusie Road Moulmen Burma）で陶磁器の指導に当つておられる由。

瀬戸の同窓

瀬戸地区には窯業の同窓は約一〇名おりまして皆元気にやつております。そして瀬戸蔵前会を組織し会長赤塚幹也氏（大正六年卒）副会長加藤政良氏（昭和十六年卒）及常任幹事は野村三治氏（大正十一年卒）で年一、二回会合を開きなごやかにやつております。

（加藤政良氏寄）

◇学内だより◇

ワグネル先生生誕百二十五年碑前祭

故ドクトル・ゴツドフリード・ワグネル先生の生誕百二十五年祭が駐日独逸大使館と本学共催により昨年十一月八日先生の御命日当日午後三時から学内ワグネル先生の記念碑前でドクトル・ハンス・クロル独逸大使閣下及大使館員の方々と本学内田学長外教官など多数参列して執行された。尚学長よりの案内状により本会々長大野政吉氏及藤岡幸二、高井三郎の諸氏も参列された。

独逸大使閣下と内田学長の献花に次で大使と学長の挨拶があり一同拝礼して式を閉ぢた。尚本日は窯業協会でも東京の青山墓地で役員が参列して墓前祭が行われた。

岩井津一講師の学位授与祝い

かねて本学地質鉱物教室の岩井講師から東京大学に提出中の学位論文が受理され先般理学博士の学位が授与されたので有志相より昨年十一月二十四日午後三時から本学職員食堂で岩井氏の御家族を囲み学内外から約五十名出席して盛大に行われた。山内教授の祝辞に次で夫々御祝いの言葉を述べた後岩井氏と御家族の謝辞があり談笑裡に会を閉ぢた。

湊よきさんが勤続三十年

窯業のおばさんで皆さんに親しまれている湊さんは今年で勤続三十年になりそして還歴でもある。関東大震災で本学が蔵前を焼出されて現在の大岡山に移りバラツク時代の昭和二年十二月からのお馴染である。皆様と共に勤続と還歴の御祝をしてあげたいと存じますので其節は御協力を御願い申し上げます。

湊さんはいつも元気に勤めておりましたのですが、昨年十月十一日に出勤してどうも顔面に異状があるので数日かゝつて昭和医大病院で診療の結果軽い脳出血（眼底出血）と診断され十五日に入院加療中であつたが経過はよく去る四月三十日約六ケ月ぶりに退院し目下自宅で静養中であるが時々学校へも来て話して帰るが以前と変らない位に健康を回復されております故御安心下さい。

（下積の仕事せつせと三十年）

宇田川、宗宮両君の壮行会

米国ペンシルバニヤ大学に留学する、宇田川重和君と宗宮重行君（両君共昭和二十七年卒）の壮行会が十二月五日午後四時半から工大の職員食堂で開かれた。職員、学生の多数と両君に関係の深い学外の方々が集つた。幹事の挨拶がすんでビールで先づ乾杯した。山内、森谷両教授より米国視察旅行中のエピソートの話をかわきりに各列席者から夫々両君に対し心からの壮行の祝詞が述べられ最後に両君から謝辞が述べられ和気靄々の内に会を閉ぢた。尚宇田川君は昨年十二月十三日夜、宗宮君は本年一月四日夜夫々羽田空港から日航機で学内教官や学内外先輩や同僚多数の見送りを受けて元気に出発した。尚宇田川君はブリンドレイ教授、宗宮君はオスボーン教授夫々

の研究室で両教授指導で研究されている。

卒業論文公聴会

三月十三日(水)午前九時から本学七番講議室で下記の通り行われた。

一、高熱伝導率材料の熱伝導率の測定及び輻射加熱方式の研究　古志野　稔（河島研）
二、顕微鏡観察によるTiC系サーメットの基礎的研究　大熊　魚（河島研）
三、水滓の塩化アンモニウムに対する溶解性の研究　八木　琢夫（田賀井研）
四、Masonry Cement Mortar の Efflorescence の研究　涌井　歳一（山内研）
五、スラグの水砕化に関する基礎的研究　木村　健（山内研）
六、合成スラグの生成熱と失透熱の研究　西　晴哉（山内研）
七、Sessile Drop 法によるガラスの表面張力及び Wettability に関する研究　尾島　正男（山内研）
八、燐酸ガラスの着色について　田畑　勝弘（森谷研）
九、UO_2 -ThO_2 系原子炉用核燃料の試作並びに研究　石原　幸正（清浦研）

Bogue 博士の来訪

セメント化学の世界的権威者であり、The Chemistry of Portland Cement（一九五五）の著者としても有名な Robert Herman Bogue 博士には五月三日来日され、セメント関係の研究所、工場の視察、講演、交歓、或は名所旧蹟の観光とあわたゞしいスケジュールを割かれて二十日本学に来訪、窯業関係の研究室を参観され、二十三日ホノルル経由帰米の途につかれた。

昨年山内教授が米国 Washington の Bureau of Standards を訪問の際 Bogue 博士には欧州、アフリカ、印度への旅行の予定があり、日本へも立寄りたい希望を述べられたのがきつかけで今回の来日が実現した。本学来訪の当日は生憎の大雨であつたが Bogue 博士には極めて熱心に興味深く参観された。一般に設備、スタツフに於て米国に比べても相当充実しているとの印象を持たれたようである。たゞ各研究室に比較的同じような装置が重複してならべられている点に気付かれ、更に深く専門化することを期待されると共に、研究成果の外国語による発表、特に一九五九年 Washington に開催予定の Symposium に盛な参加を希望された。

離日に際してはパンアメリカン機の出発があまりに早朝であつたところから山内教授が代表し見送られたが、御世話頂いた方々の心からの歓待に深い感謝の意を述べておられたとのことである。

Bogue 博士は現在 Portland Cement Association と National Bureau of Standards を勇退され顧問を勤められて居り、今年六七才、宛名は 4119 Davis Place, N.W. Washington 6, D.C., U.S.A.（近藤記）

Grim 博士の来訪

イリノイ大学教授 R.E. Grim 博士は去る二月二十八日に空路来日し三月一日に本学を訪問された。主として窯業の素木研究室と地学研究室を見学された。

素木研究室では特に粘土に吸着された水分の性質とそれによる粘土の性質の変化に対する意見を交換され特に粘土の脱色に関する実験には興味をもたれた。地学研究室に於ては本邦窯業原料や製品のプレパラートを鏡検され、研究室員と意見の交換をされた。特に岩井津一博士のX線加熱実験にはきわめて興味を持つて討論され、又ズニ石を含んだ蠟石や杉浦孝三氏の合成したインデイアライト結晶などに深い関心を示された。地学研究室員と撮影した写真は窯業協会誌七月号に掲載されてある。（山田久夫記）

高野忠氏来訪

高野忠氏(大正九年卒)は約一年半に亘りセイロンのネガボで陶磁製造の指導に当つておられたが五月に帰朝され八月三十日に来学された。加藤義守氏(昭和二十三年卒)も同じ目的で同地に滞在中とのこと。セイロンに於ける陶磁原料はカオリンのよいものが不足しておる由話された。日本硝子株式会社の華房嘉勝氏(大正六年卒)もセイロンのナツタンデーアで工場建設と製壜指導に当つておられ、加藤氏と共に時々御会いした由である。尚中根俊雄氏(大正五年卒)は目下タイ国バンコツクに陶磁器製造の指導で滞在しておられる由である。

外地で御活躍の皆様の御健闘を御祈りします。

窯業助手懇談会の近況

本会は昭和三十一年初頭自発的に発足し、当時の設立趣意書を本誌第三号に載せて御支援を御願いしたが、爾来毎月一回集つてすでに一年半を経ているので、その経過を簡単にお知らせしたい。

助手は窯業の中でも中堅的位置にあつてしかも自ら研究を促進しなければならない立場にあるが、現在のような進歩発展の急速な時期にあつ

ては、能率的な研究態度や方法をとらなければ優秀な研究業績をあげることはおぼつかない。現在の状況を相互に反省して自ら取るべきものはとり、また窯業全体として取るべき方法を提案して実行に移して行かなければならないと思う。これが具体案を実行する方法として先づ教授、助教授、講師、助手を混えた合同懇談会を助手提案で二回開いた。主なテーマは窯業研究所のあり方、助手の研究論文、図書の整備、文献のカード化、共通備品の購入および使用方法、外来講師との懇談についての提案であつた。これに対し山内先生より窯業研究懇談会の提案があり、本年七月発足して実行に移されることゝなつたことは誠に喜ばしい。（別記参照）また、本年六月から毎月一回定例的に合同懇談会が開かれることになつた。なお助手懇談会としては本学、および他大学から講師を呼んで懇談することを定め、山内先生から外遊談、森谷先生から窯業研究の今後のありかたについてそれぞれ有益なお話を拝聴した。（窯業協会誌八月号「窯業に於ける基礎的研究とその方法」を参照されたい。）

研究の実施者である助手とゆう地位には研究の実行の上でいろいろの悩みが存在するが、同窓諸氏の御鞭韃と御指導を得て、窯業界の発展に積極的な寄与ができるよう念願している。（佐多記）

（なお助手の中で宇田川君はペンシルバニヤ大学窯業科へ留学、太田君は旭化成東京研究所窯業部門に栄転された。現在十二名）

窯業関係最近の研究設備

本学窯業関係の研究室で現在行われている研究や、その設備については最近の卒業生はよく御存知と思いますが、大分以前とは様子が変つて来て居ります。その一端を近頃入つた装置の面から簡単に紹介して御参考に供します。

研究のテーマは従来からの一般の陶磁器、耐火物、ガラス、セメントなどについても勿論、物理化学的な観点、統計的方法の導入、あるいは高い精度の計測など新しい方法の適用によつて研究が進められて居ります。然し現在のところその主流は新しい原料の組合せによつて造られる特殊材料の製造研究に向けられて来ているようであり、それにともない必要ないろいろの新しい装置が入つて来ております。このような特殊材料にはガスタービンあるいは原子炉材など先端的な技術からの要求による耐熱材料としてのサーメットやセラミックコーティングと構築材料としてのスラグ系セメントなどあり、文部省から機関研究費、化学促進研究費あるいは特殊研究費、其他の交付を受けて順次新しい装置を設備し整備にかゝつて居ますから近い中にこのような方面でも追々成果が挙がるようになるものと期待されます。これらの新しい装置を一括して挙げますと

一、粉砕、混合

サーメットの関係でステンレスポットに超硬ボールやアルミナポットが普通に使用されつゝあります。セメント関係では10kgおよび1kgの鉄ボールミルが新たに入つております。

二、成形

70tonの上下押プレスにより分解金型による高圧成形、および液体中で均一に加圧する静圧プレスが行われるようになりました。特に径10cmの黒鉛型による真空ホットプレス（2000℃）が完成し複雑な成型物が一挙に成形と焼結が可能となりました。

三、焼成

1800℃焼成ガス炉、重油炉、水素炉、五kW高周波誘導加熱装置とこれに附随した2000℃まで加熱できる真空炉が動いております。

四、研磨

焼結物の切断および表面研磨のために普通のSiC砥板による切断器、ならびに硬材質のためにダイヤモンドカッター、研磨板を附した精密平面研磨盤が設備されて、材料試験用試料の精密加工が可能となりました。

五、恒温装置

セメント養生室に自動調節の冷凍機が入つて常時20℃に保持できるようになり、また-35℃～20℃のセメント寒中硬化特性試験ができるようになつた。

六、物理化学試験

粒度分布測定、熱天秤、熱分析、熱膨脹測定、初期水和熱測定、溶解熱測定等すべて自動化され記録される装置が設置され飛躍的に新しいデータが期待されるようになりました。その他セメント関係ならびに原子炉燃料関係でアイソトープ、放射線測定器が整備されつつあります。

七、X線および顕微鏡

待望していたガイガー計数管による記録X線装置が理学電機から入り、またこれに附随される1400℃までの加熱装置が設置され高温状態の鉱物決定が容易となりつゝあります。顕微鏡ではオリンパスの位相差附反射顕微鏡が入り、サーメットやセメント関係で利用されております。また高温顕微鏡が入りました。顕微鏡用試料研磨機が入つて短時間に最終研磨まで行えるようになりました。

八、材料試験

新たに20tonの高精度の強度試験機が設置され、また非破壊試験として動弾性係数測定器がセ

メント用に利用されております。サーメット用には高温度抗折力破壊試験機ならびに電子管式自動平衡記録調節装置を附した曲けクリープ測定機、スポーリング試験機が使用されつゝあります。

（近藤、佐多記）

全学祭について

本学創立七十六周年を記念して今年も恒例の全学祭が五月二十五、六日の両日行われた。最初、化学工学課程の四年生全体がまとまつて、一つのテーマの下に展示をしようという話があつたが、結局、我々窯業関係の学生としては、独自の立場から一般の人々に窯業というものの認識を深めてもらうために、別個に展示を行うことにした。構想については四月頃から討論を重ね、又先生方の御指導御鞭韃をいたゞいて検討した結果、今年は耐火物を中心に窯業全般の紹介をすることになつた。

当日の内容は、製鋼用の各種煉瓦及びガラス熔融炉用煉瓦の使用前と使用後の実物によつて、耐火物に対する今迄の先輩諸兄の努力によつて発達して来た跡を説明し、現在の問題点の解説から将来の発展の方向を示し、又各種耐火物の種類と特徴を述べ、耐火物が近代工業に欠くことの出来ないものであることを強調した。ガラスについては、各種ガラスを展示し、特に耐熱ガラスについて解説、デモンストレーションを試みた。さらに最近の話題である原子炉遮蔽用コンクリート、セラミックフユーエル、原子炉用黒鉛の展示解説や、建築材料サーモコン或は、サーメットの展示から、陶磁器関係では、耐酸磁器、碍子及び電気器具用磁器を並べ、最近の進歩発達の一部を紹介した。又この外に、長さ約五米のトンネルキルンの模型を造り、電熱で九〇〇度程度にして運転し、泥漿の鋳込実験なども行つた。これらとは別に、短編映画「やきもの」、「セメントの話」、「志野」の上映を行つて、大いに窯業の啓蒙に努めた。何分にも四年生は一〇人しかいないし、予算も少いため、やりたい事は沢山あつたが、不本意ながら断念せざるを得なかつた。

昔の様に科別制度でないため、下級生との連絡がとりにくいが一年及び三年の諸君一五人余りが自発的に参加されたことは大変有意義であつたと思う。

我々学生の一人よがりの所も多かつた事と思うが、一般の方々に窯業を幾分でも理解して頂けたのではないかと思つている。又工大の下級生の諸君が、展示を見て、窯業に関心を持ち、今迄よりも多数の諸君が窯業コースに進まれるならば、窯業の進歩のために幸いするものと思う。尚全学祭に興を添える為例年の様に楽焼をやつた所盛況であつた。

最後に、展示品、映画フイルムを心よくお貸し下さつたり、一部御寄贈頂いたりした諸会社及御配慮を頂いた方々に厚く御礼申上げます。（尾野幹也記）

太田千里氏退職転任

太田千里氏（山内研究室、助手）は山内教授のもとで永年スラグセメント関係の研究をしておられたが、去る四月二十四日付講師に昇任し四月三十日付で退職され旭化成株式会社（研究所）に栄転された。

岡田靖郎氏退職転任

岡田靖郎氏（稲生研究室、雇）は勤務の傍ら都立大学建築学科に通学中の所三月に卒業され、四月上旬に退職して日本原子力研究所（建設部設計課）に栄転された。

◇昭和三十一年度事業寄附金芳名

（会誌第三号発表以後）

一、〇〇〇〇円　大野政吉、井本俊喜
五〇〇〇円　越前谷民雄
三〇〇〇円　榎本修二、三沢賢一
二〇〇〇円　山田久夫、太田千里、岩井津一、佐沢光夫、宇田川重和

◇昭和三十二年度事業寄附金芳名

名古屋市で開催の総会及懇親会に対する特別寄附金（六二、〇〇〇円）順不同

金額	会社名	扱代表者氏名
七、〇〇〇円	伊奈製陶株式会社	嘉悦　新
五、〇〇〇円	石塚硝子株式会社	石塚　正信
四、〇〇〇円	佐治タイル工業株式会社	五十鈴隆吉
五、〇〇〇円	瀬戸地区	加藤　政良
七、〇〇〇円	東海炉材株式会社	浮洲　武彦
三、〇〇〇円	日本板硝子四日市工場	油田　恒夫
八、〇〇〇円	日本碍子株式会社	十時　一雄
八、〇〇〇円	日本陶器株式会社	大石　信雄
五、〇〇〇円	日本特殊陶業株式会社	名和　二郎
五、〇〇〇円	日本陶管株式会社	馬渡　豪
五、〇〇〇円	丸恵寿合資会社	加藤　正之
三、〇〇〇円	久保季吉、倉田元治	
二、〇〇〇円	浮洲武彦	
一、五〇〇円	窯業卒業五十年会	
一、〇〇〇円	鈴木四郎、大野政吉、山内俊吉、河島千尋、松崎錠三、木船要太郎、北川信吉	
五〇〇円	一条茂喜司、堅田欽次、永塚楽治、森谷太郎、清浦雷作、岩切一良、	

遠藤敏夫、江藤哲夫、尾野勇雄、西田一雄、山室忠臣、宇野達路、他一名

三〇〇円

田賀井秀夫、山田久夫、素木洋一、加藤春美、関口淳、田村忠臣、日笠泰行

二〇〇円

稲生謙次、岩井津一、宮川愛太郎、川久保正一郎、吉田博、伊藤豊成、塩田政利、管沼武彦、御代健次郎、吉村満雄

一〇〇円

佐多敏之、斎藤進六、毛利純一、青島清二、鈴木弘茂、大矢真吾、大場立夫、杉浦孝三、黒田泰弘、岡田久子、田中弘子、湊　よき、境野照雄、近藤連一、村田順弘、長谷川泰、下平高次郎、上西義介、吉永善子

五〇円

浜田勤、瀬高信雄、柴本房子、武久松代

名簿発行と会員の移動に就て

隔年発行の名簿昭和三十二年用は、著名会社へ御願いした広告掲載による御援助により昨年十一月末に発行し会員の皆様に御送りすることが出来ました。毎々御援助下さる会社と御配慮を頂いた同窓の皆様に厚く御礼申し上げます。

本年末は名簿を発行致しませんので御住所、勤務先其他の移動等の御通知を頂いたもの及当方で調べた訂正事項を下に纏めましたので、三十二年用名簿の末尾へでもはりつけて頂きたいと存じます。

尚この外に訂正すべき点がありましたら御本人及他の同窓の方の分も御気付の節は御手数乍ら御一報下さる様御協力を御願い申し上げます。特に住所不明の方、海外移住の方の御住所を御存じの方は御知らせ願いたいと存じます。（宮川）

【会員訃報】

今泉与一氏（大正四年卒）

吹田市千里山一二八

昭和三十年十月十六日永眠されました旨御遺族から御連絡がありました。御冥福を御祈り申上げます。

鈴木己代三氏（大正九年卒）

日本碍子株式会社専務取締役

昭和三十二年一月七日永眠されました。御冥福を御祈り申し上げます。

金島茂太先生（元教官）

岡山県御津郡上建部村富津

昭和三十二年四月十日永眠されました。御冥福を御祈り申し上げます。

［会員名簿は省略］

昭和三十二年三月卒業生［住所と勤務先は省略］

石原幸正、大熊　奐、尾島正男、木村健、古志野　稔、田端勝弘、西　晴哉、八木琢夫、涌井歳一

○大学院修士課程卒業　［住所と勤務先は省略］

坪井竜明

［窯業関係職員名簿と窯業関係元教官は省略］

○在学生（卒論研究中の四年生）［住所は省略］

新井博之、石原　毅、尾野幹也、副島繁雄、田丸貞美、波多野高文、宮入英彦、山岸　茂、山田寛治、渡辺信彦

昭和三十二年九月二十日　印刷
昭和三十二年九月二十五日　発行
編集兼発行人　宮川愛太郎
発行所　窯業同窓会
東京都目黒区大岡山一番地
東京工業大学窯業研究所内
振替東京一九六八五五番
印刷所　株式会社共栄舎印刷所
印刷者　丸岡三郎
東京都港区芝金杉川口町五番地